教職課程センター紀要　第5号　(1)-(12)ページ、二〇二〇年一二月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.5 (1)-(12), 2020
論文

陸軍報道班員としての国分一太郎の従軍体験
――『兵隊』に描かれた中国民衆像――
The Embedded Experience of Kokubun Ichitaro as a Military Pacification worker: Image of Chinese People Sketched in Journal "*Heitai*"

田中　寛
Hiroshi TANAKA

キーワード：従軍体験　宣撫班　中国民衆像　東亜新秩序　言語文化接触
Key word: Embedded Experience, pacification-unit, Image of Chinese People. East-Asian new discipline, contact of language and culture

1　はじめに

国分一太郎は国語教育者として出発し、戦後は「生活綴方運動」を積極的に展開し、理論的実践的指導者としての地位を確立した。その功績については今日、色褪せることなく評価され、その意義をめぐる議論、考察も行われている。その一方で、戦時下にあって国分一太郎の戦時体験としての民衆像が、その後の実践活動にどのように投影されたのかについては、詳細に語られぬままに推移しているように思われる。本稿ではこれまでの先行研究を補遺する試みとして、従来看過されていた著作についてとりあげ、そこに見られる中国民衆への眼差しを検証してみたいと思う。取り上げる記事は『兵隊』に掲載された文章である。『兵隊』は日中戦争の勃発後に出された、前線兵士の手記、座談会、戦場となった当地の風物詩などをスケッチ的に掲載したもので、伏字もなく比較的率直な当時の戦場、銃後の社会生活などが描かれている。日中戦争中の昭和14年5月～19年2月、中国の広東で南支派遣軍報道部が刊行し（全36冊）、検閲もなく、兵士たちが自由に執筆されたという意味では、他に類のない雑誌である。B5判型で月二回を標準に刊行され、頁数は七十頁内外でカラーの表紙のほか、ときにはカラー印刷の折込みまで挿入され、写真もふんだんに収録されるなど、日本の先進印刷技術を喧伝したような節も見られる。同時にそうした工夫は戦時下の戦闘行為が侵略を意味するのではない事実を広く周知せしめる意図もあったように思われる[1]。

創刊号(昭和14年7月)に南支派遣軍司令官・安藤利吉中将が雑誌発行の目的を冒頭で「大東亜共栄圏確立の理想を果たすため、戦友相互の絆を固くする…」ことだとしている。雑誌の大半は兵隊の随筆・手記・小説・詩・短歌・俳句・川柳で占められている。軍の機密に触れるものや戦争批判はないが、行間から兵士たちの素顔が読み取れるものもある。絵画、曲線美豊かな姑娘（クーニャン、中国人女性)を描いたもの、風物のスケッチなどもそうである。

図(1)　『兵隊』表紙・裏表紙には現地の風景、植物などもこのんで描かれた。
（復刻版、刀水書房による）

ところでいくつかの国分一太郎についての書誌を検分するに、戦後の綴り方教育の推進者としての輝かしい功績への顕彰、評価が主流であり、その早期の教育思想の形成に、若き日の国分一太郎の従軍体験がどのように介在し、投影していったのかについては殆ど明記されておらず、いわば国分の空白部分となっている。たとえば、次のような人物像である。

国分一太郎　こくぶんいちたろう　1911-1985　児童文学作家、評論家。山形県に生まれ、山形師範学校を卒業。教員生活中、非合法的な組合運動で検挙される。第二次世界大戦後、現在の日本児童文学者協会設立(1946)、日本作文の会を結成（1950）に参加する。『鉄の町の少年』(1954)、『リンゴ畑の四日間』(1956)など、民主主義的人間像確率の過程をわかりやすく読みやすい物語で描き、若い作家たちに大きな影響を与えた。また、『生活綴方読本』(1957)などで綴方運動にも主導的な役割を果たす。（神宮輝夫『日本大百科全書』ニッポニカ）

戦時下の国分の従軍体験については、後述するようにいくつかの考察があるものの、十全に検証されたわけではない。戦時体験がどのように順化ないし浄化され、思想的に〈止揚〉されていったかは、国分自身の総括が最優先されるのであるが、その自らの手記的な検証がなされていない以上、残された文章から考察を試みるほかはない。

2　国分一太郎の従軍関係記事一覧

戦前戦中の国分一太郎の従軍体験関連の記事については前田（1998, 2001）の報告が重要であるが、補充したものを含めて次に掲げた。

論文。報告・エッセイ題目	掲載雑誌、出版社	発表年次
⑴ **花嫁宣撫**	**『兵隊』第 8 号**	1939. 9. 15
⑵ **筆談帖から**	**『兵隊』第 9 号**	1939. 10. 20
⑶ **戦緑帽の話**	**『兵隊』第 11 号**	1940. 1. 1
⑷ 広東だより	『台湾時報』248 号、250 号	1940. 8/10
⑸『センチノガン』*	帝国教育会出版部	1941. 1. 30
⑹ 創作　南の人　第一回*、第二回*	『台湾時報』253 号、254 号	1941. 1/2
⑺ 支那の子供　教育科学研究会編	『児童文化（上)』西村書店	1941. 2
⑻ 水牛番の子供*	『少年倶楽部』大日本雄弁社	1941. 4
⑼ 旧秩序支那における児童文化 巽聖歌編	『新児童文化』有光社 1-4 冊	1941. 4
⑽ 未来亜細亜伝承童話覚書*	『出征将兵作品集・戦線点描』	1941. 4
⑾ 広東子供生活ノート	『教室』	1941. 5
⑿『外国権益』*	厚生閣	1941. 5. 1
⒀ 広東生活ノート	『教育』岩波書店　月刊	1941. 5
⒁『戦地の子供』	中央公論社　B6　450 頁	1941. 6. 18
⒂ アジア的人間像の創成	『教育』岩波書店　月刊	1941. 9
⒃ 書評　近藤えい子『厨にありて』	『教育』岩波書店　月刊	1941. 9
⒄ 戦場の幻燈*	『少年倶楽部』大日本雄弁社	1941. 10
⒅ 一条の道*	『少年倶楽部』大日本雄弁社	1941. 11
⒆ 支那における国語教育と児童文化の問題	『国語文化』	1941. 11

図⑵　国分一太郎戦時下著作一覧（発表順、『』は雑誌　*は単行本）

⑴～⑶『兵隊』は南支派遣軍報道部編集の雑誌、刀水書房復刻。兵士の日常を記録したもの。⑷、⑹の『台湾時報』は台湾総督府発行。⑻⒄⒅大日本雄弁社は現在の講談社。⑾『教室』は出所不明。⒀当該号に掲載無し。所在不明。⒆『国

語文化』は育英書院発行の月刊誌。短いエッセイものから単行本までさまざまである。まとめれば数巻になろう。

「国分といえば生活綴方、生活綴方といえば国分」と言われるように今日でも国分に対する評価は依然としてこの点に重きが置かれている。各種研究会、および発表された論攷にもその傾向は明らかである。一方、津田(1986, 2002)、同(1999)、前田均(1998)、同(2001)、成重(2008)など国分に対する一定の評価の中で戦時下の彼の活動について検証をこころみる作業も行われてきた[2]。侵略の偽証をさぐる作業は、あらためて教育の本質を問うものであり、短期間に従軍した若気のいたりであれ、そこには現代の教育、アジア連帯の思想にかかわりをもつ内実も見いだされるのではないか。転向か戦争協力か、という問題設定は、それ以前に教育の根幹、本質にも関わる重要な検討課題である。

3　「花嫁宣撫」にみる中国民衆像

国分一太郎の掲載記事は計三回みられるが、本稿では二篇（図⑵に挙げたものの濃字記事）を取り上げる。（のちに『外国権益』に所収）まずは「花嫁宣撫」である。題目から見て遭遇した現地の婚礼の花嫁と宣撫がどう結びつくかは判然としない。そもそも宣撫とは、きわめて軍事的な色彩の強い容疑であり、たとえば、

　戦争及び事変の場合、占領地の人民に対し、その戦争の意義、占領国のこれからの意図などを宣伝し、私事的にこれを撫育する仕事に当たる団体を宣撫班というので、これは支那事変において初めて使われた名称であり、その前にこの名称の使われた例はない。（『興亜ノート』1939:16）

のように説明されている。人心の安定には「私事的な撫育」も奨励された。宣撫班の仕事は具体的には避難民を無事に帰順させること、そのためには市街地に赴いて宣伝することが義務付けられた。さらに新民会の施策や東亜新秩序の宣伝、日本語・日本文化の普及が任務とされた。また医療班により負傷詳住民の治療にあたったこともある。戦場とはまた異なった銃後の日常であるが、日本軍という日本人と避難民、占領地の民衆との言語接触が発生したことは、また戦争の中の日常を顕わにした[3]。国分の文章に描かれた光景はその一場面である。以下、本文を全掲する（現代仮名遣いに直した。言及関連箇所の傍線は筆者）。

花嫁宣撫

報道部街頭宣伝班　　国分一太郎

その日はきっと黄道吉日であったのだろう。

前進した軍隊の靴跡を探し探し、白い砂山を越えてゆくと、私達は先ず古めかしいリズムのラッパの音をきいた。赤い着物をつけた少年たちを先頭にして、美しいカゴをかついだ人々の群が近づいて来た。大きな提灯も交っている。葬式の列が山路をたよりにこちらへ来るのだろうか。しかしラッパを吹く少年たちの頬っぺたのふくらみがよくわかる頃には、それが嫁入りの行列であることを私は聞かされた。物珍しさに私はうっとりした。行列が私達とゆきちがいになり、カゴをかつぐ男の肩でギーギーという音が聞えたその後も、私はふりかえってながめていた。部落の共同用具だという長い真鍮のラッパも、けばけばしく塗ったカゴも珍しかった。軍隊は討伐前進をなし、私達は宣撫行軍をつづけていく。こんな日に花嫁の行列を見るということは、特に大陸らしい光景である。広東の街で、はらんでいる女を見る時でさえ、この戦の巷でと指など折ってみたくなる私は、今こうして花嫁の行列を見送りながら、人生のいとなみ事に思いふけった。

「君たちもこんなにしていくのだろう？」

やがて私は宣伝員の女にからかって見た。「ムハイヤー、ムハイヤー」（注「違う違う」）と二人の女は弁解した。あれは田舎の娘だからと説明した。

ところで、水葵の紫の花が一面咲いているたんぼを通り、沙田抽の子供の頭くらいある青い実の下をくぐって、別の村にはいった時、私たちはそこでも花嫁の行列にいきあたった。カゴの扉はしめられていて、覗くこともできないが、できたら覗いてみたい気持は胸にあふれた。扉に手をかけられぬ寂しさをこの暑い日ざしにびっしりと閉められて、かつがれていくのは、さぞ苦しかろうと同情することによって紛らわした。

幾つかの村で宣伝演説をやり、最後に私たちは〇〇についた。この部落は昔から土匪の巣窟だという定評があるといい村長が土匪の親分であり、部落には機関銃さえあったという。だが、土民の船を借りて川を渡り、日ざしがまぶしい程てりつける村にはいった時、村人はすっかり逃げ去っていた。生

れたばかりのあひるやひよこだけが黄色く細かに動いていた。おびえる豚が、大陸でなくては見られないすさまじさで逃げかくれた。

「不使慌、不使怕！」

桃色の、十二三匹の仔の群と、わずかに居残ったお婆さんたちと、豚の親達に、私たちは宣撫の言葉をなげかけた。そして私達は笑い崩れた。人をあつめて宣伝演説の仕様もないのである。軍隊の一部は、後の山の峯に旗をたてて、この山を越して逃げ去った者どもを偵察していた。

やがて私達が村の三辻までとどいた時、わいわいとさわいでいる兵隊たちを発見した。笑いさざめき、あけろあけろとさけんでいる兵隊達の真中には、ここにも花嫁のカゴが鎮座していたのである。カゴかきやラッパ吹き達は逃げ失せたのか。そばにはときどきと（原文ママ）おびえている一人の老婆が立っていた。老婆がうろたえた声で何かを叫び出すと、兵隊達はひとときしいんとなった。と、カゴの中で、シクシクと泣く声が聞えて来た。

いるのだ。いるのだと兵隊達は又さわいだ。お婆さんは又あわて出して、カゴの廻りをぐるぐると駆け回った。

その時、私達の宣伝員が、「不使慌、不使怕」を叫んで近づいた。日本兵は珍しいからさわぐのだと声をかけた。二人の女宣伝員がそれに次いで、「不使驚、々々々」（注「驚かないで」）と言いそえた。すると老婆は顔をあげて、ほっとしたように息をついた。それから静かに手をのばして、馬大元帥とかかれた赤い扉を、おもむろに開きはじめた。

頬の豊かなまる顔の花嫁があらわれた。つのかくしの布をずらしていて、眼のあたりはわからない。右の口もとに黒子のある花嫁だった。はじめはうつむいてはずかしがった。

つづいて私どもの宣伝員は、老婆と開帳された花嫁に今日の次第を説明した。日本軍隊の来たわけは、遊撃隊や土匪をほろぼしに来たのである。村の良民をまもるために来たのである。結婚式の日にこんな悲しいことがあって気の毒だが、もしもお前の亭主となる人が良民なら、やがてまもなく帰るだろう――こういう意味の演説だそうだ。これは後できいたのだが、その時でも私にはわかっていた。なぜといえば、演説が終ると老婆はだんだんと顔をあげ、しまいにはにっこり笑い出した。かくて私達も兵隊達も、その花嫁をまん中にして、白光の中に大笑いした。こういう土匪の村に嫁入りする。この村娘の身の上を思いながら、私は山のいただきをながめていた。花嫁の夫よ良民であれ！あの峰を越えて帰って来い！その頂には、一人の兵隊の銃剣が今しキラリと閃いていた。

ここには、例えば、同じく宣撫工作に従事した木原孝一の「戦争の中の建設」(1941) にみるようなストイックな感傷は皆無と言ってよい。たとえば、木原は侵攻した農村集落で目撃した光景を次のように綴っている[4]。

……僕は木製の粗末な椅子に腰を掛けた。すると入口の煉瓦壁にもたれて十二三歳の少女がオカッパ頭をかしげて僕を見つめているのだった。黒い頭髪と円い頬と少し尖った顎とそして素直に伸び切った足。僕はふと何かをねだる時の妹の半ば傾いた額を思い出した。僕にはその少女が微かに笑い出しそうに思われた。妹はそうした時に白い歯を大切そうに一寸のぞかせるのが癖であった。思わず僕はその少女を見つめながら笑い掛けた。一瞬の後僕は云い知れぬ強烈なもので胸を突かれてしまった。少女の眼は微笑を含んではいなかったのである。

占領者の高慢な思い込みとは裏腹に怯えすくむ少女の対照的な描写こそを国分は描くべきではなかったか。木原は次のようにも述べている。路傍で麻雀に明け暮れる民衆の姿。食糧さえあれば幾日でも続けている。

……彼等を働かせるものは食糧の不足だけだ。彼等に文化を与え生活を与えるのは一体如何なものなのか。彼等は何によって動くのだろう。彼等の生活を建設するものは何なのだろうか。それはすべて不可解のまま薄暗い煉瓦の中に沈んでいる。……

二十歳前の木原と十歳年上の国分の感性とを分かつものとは何であろうか。それは自らの言語力、自らの感性で体制にかかわらず思考し、記録する希求性ではないだろうか。異文化への眼差しとはそういうものではないのか。標語としての「明朗」や「建設」という言葉は夜郎自大の宣揚でしかなかったのである。

国分は多作で、作文教師の名を恣にすべく多くの見聞録をものしたが、内面的

な表出はことごとく排していたように思われる。ここにあげた「花嫁宣撫」もその一つで、実に淡々とした筆致で書いている。最初、標題から花嫁が宣撫班に協力している図を思い描いたが、実はカゴの中に入れられた花嫁を兵隊たちが興味津々で見入っている。そこへ、女宣伝員がかけつけ、こわがる花嫁に「怖がらないで」と説明している、ただそれだけの情景であるが、この女宣伝員については「君たちもこんなにしていくのだろう」と花嫁姿を想像させるからかいを投げかけたりしているだけで、女宣伝員が「売国奴」として「聖戦」に参加している複雑な心情に心を寄せることは微塵もない。こうした無邪気とも思える光景が「明朗建設」の象徴なのか。女宣伝員が「ムーハイヤー」（「ちがう、そうじゃない」）といって弁解している無邪気な様子しか描かれていない。広東語で「ハイヤー」は「そうだ」「ムー」はその打ち消し語という説明もない。どういういきさつで女宣伝員が「宣撫行軍」に組み入れられているのについても触れていない。

この一文から、読み解くことが出来るのは、宣撫行軍の実態である。同時に匪賊、土匪を「討伐」するための行軍である。ここには「皇軍」という軍隊用語は出てこないが、「行軍」＝「皇軍」が国分の中にも同居していたふしがある。また、この一文には宣撫工作をする上での貧しい中国語が採録されている。「不使慌、不使怕！」（「あわてるな、こわがるな」）は中国の抗日ドラマ・映画にも出てきそうである。兵士が携行した「兵隊支那語」「軍用支那語」等にもその記載があるかどうか、検証してみる必要があろう[5]。

4　「姑娘宣撫行」に描かれた〈宣撫〉の実態

國分の記事に登場する女宣伝員の実態については、『兵隊』の第一七号（一九四一・一）に矢崎裕久「姑娘宣撫行」という詩が掲載されている。日本軍に同行する中国人女性宣撫員の様子が具体的に描かれているので、次に全文を転写する。

姑娘宣撫行

群報道部　矢崎裕久

清楚な支那服を着た
中華の乙女達が
日本の宣撫員とゝもに
街頭へ
部落へ
野へ
山へ
前線へと
前進してゆく。
彼女達は宣撫班。

はじめ彼女達が
戦争のたゞ中の
前途の混沌とした道で
恐怖の感情のうちに
生れてはぢめて
目前に
日本の兵隊を見
日本人を知り
そして皇軍の良心を通して
日本の真意を知った時
彼女達の内部には
新しき変化が起った
新しき精神が萌芽した
建設への高き意志がつき上った。
彼女達は
身命を賭して悔いざる
一ツの進路を発見した。
その高い目的に
彼女達は身命を投じた。
彼女達は宣撫班。

彼女達は皇軍とともに
泥と埃と汗にまみれつゝ

我々と同じやうに
新しき建設への
高き望みと　意志の火が
大きな宝玉の如くに
光り輝いていた。

中華人の彼女達は
中華人の弾丸によって
何時
たほれるか
わからなかった　だが、建設の礎石！
その栄光が
霊魂の誇りが
我々と同じやうに彼女達のいのちにも
熱き火をそゝぎ
血と銃火の咆哮する
前線へと
進んでゆく。
彼女達の内部には
何時たほれても
悔ひない精神が
直立してゐた。
我々と同じやうに
生命を挺して
進んでゆく彼女達の
胸の底には
生死をつらぬいて
前進してゆく意志の焔を
燃えたゝしてゐた。
今日は東明日は西へと
進んでゆく

彼女達は宣撫班。

部落にて彼女達は
病める農夫に薬をあたへ
垢によごれた子供の
黒い手をとり
きたない皮膚のきず口に
薬をぬってやる。
彼女達は
群衆の前に立って説く
日華親善の真義を、
永久和平之大道を、
明朗広東農村建設を。
彼女達はマイクロフオンの前に
肩をならべて立ち
声高らかに唱和する
東亜空晴和初見曙光明――と
興亜の曲を
和平奮闘救中国――と
擁護汪精衛の歌を。
彼女達の一歩一歩の前進には
たゆまざる努力には
汗滴る足跡にはたとへ
ちいさくとも建設の芽が
天に
地に
人に
まかれてゆく。
彼女達は宣撫班。

（挿絵同筆者昭和一六年一月作）

短い行間を強いて設けて詠嘆的に讃歌する宣撫の光景がよみがえる。空白の紙面には写真の代りに兵隊の描いたスケッチが挿入されている。「彼女達は宣撫班」でくくられる四つの詩群には、女性宣撫員の輝かしき姿のみ描かれ、醜悪なものには一切耳目を閉ざしている。日華事変の写真集には、こうした宣撫班の宣伝する写真が散見されるが、科学的発明によるマイクロフォンをもつ彼女達の心中はいかばかりであったか。古き支那という呼称ではなく、「中華」を用いて建設の槌音を響かせようとした意気込みが感じられる。

戦後、こうして強制的に参加させられた女性たちは日本軍への戦争協力者として「漢奸」の汚名を着せられ、長く蔑まれた歴史があったことも銘記しなければならないが、戦争はかくも醜悪な媚態を遺したのである。注目したいのは、まず、女性宣撫員の日常を「詩」という表現手段に純そうとした心理である。作者の文芸趣味もさることながら、いささか抒情的に感慨的に描くことによって事実を歪曲、美化しようとする心理も汲みとることができる。文学的に描くことによって、より民衆の側に寄り添うという発想は、このほか従軍作家の題材にもしばしば見られる。青江舜二郎の『女性宣撫員』はその代表的な作品である。

田中（2015）でも指摘したように、日本軍は侵略した現地の子供、婦女を盾に親善を宣伝するという行動は侵略の擬態をあらわすものである。日本軍は子供と婦女子を擁護することで、民衆に興味を抱かせ、安心感、信頼感を抱かせようとした。この民心掌握は時に女性を性の対象として扱うことも忘れなかった。侵略した村落の女性を集めさせ、その中から器量のよい女性を「選別」して日本軍に同行させる。これもまた侵略行為のもう一つの擬態であったといえよう。

5　「興亜の園――大陸に唄う」

ところで国分一太郎が従軍したのは南支広東が中心である。のちに海南島にも足を伸ばしているが、『戦地の子供』に描かれたように民衆のあどけない、愚直な生活の姿態のみで、侵略の傷痕には一切触れていない。戦時報道は言論統制が敷かれ、「明朗建設」の慶賀的記事のみが採用された。思想戦、情報戦でもあった戦時下でのメディア工作については本稿で詳しく述べる余裕はないが、一例をあげれば、朝日新聞社の戦時刊行物『アサヒグラフ』（３３巻２１号、昭和十四年十一月二十二日号）掲載記事がある。時期的にも国分の従軍時期と重なっている。そこには「興亜の園　大陸に唄う」という見出しのもと、四枚の写真とともに、占領下の民衆像が紹介されている、文章は藤浦誠、写真撮影は丸山・鈴木特派員とある。最初に次のような詩が載っている。

興亜の園に　咲く花の　五色のいろか　かぐわしく
きのうふの憂ひ　雲はれて　けふ　晴れやかに　微笑みぬ

あるひは　夢に　まぼろしに　描きし　秋ぞ　いまこそは
蒼空　高く　日の丸は　御旗の許に　安らけく

花の　誘ひに　つどひ来し　小鳥の　声の　楽しさに
清き　誓いの　わかうどが　手をふり歌ふ　大合唱

図⑶　掲載の写真はキャプションの上⑷とした⑵（筆者所蔵）

同ページには「合名会社三星絵具製造所」の広告があり、四枚の写真にはそれぞれ次のようなキャプションがついている。

⑴　平和に輝く広東の街、疾風迅雷の皇軍の進攻に全同胞の血を沸かしたのも、はや一年前。一年間の戦火は、今は街中の明るい喜びに置き換えられて、中山記念堂から市中を望む姑娘たちの姿も心からたのしそうだ。

⑵　これは広東大南路に誕生した姑娘達の日本語の学校。名前は広東女子美術職業学校。難しい日本語ではあるが、新しい東洋平和建設の息吹は、うら若き支那女性達の胸にも、強く逞しく燃え上がっている。

⑶　多少及び腰ではあるが、草履履きに巻脚絆、それに半ズボンといふ緊張ぶり。広東軍警教訓練所の射撃訓練だ。

⑷　今日もまた青空。苦しかった一年前の涙ぐましい努力と温かい建設のお蔭で、あたし達は幸福だ。今和やかにそよ吹く美しい風によって掲げられた日華の国旗が翻る。

こうした戦時下の民衆を美化した描写が一般的であったことを考えれば、国分の眼差しも十分、その「空気に同調し」ていたことがうかがわれる。

6　「戴緑帽の話」にみる中国民衆像

もう一つの文章は『兵隊』十一号に掲載された記事である。以下は全文である。

暑くてたまらないので、私は道端の溝から一枚の葉っぱをむしった。水草の一種だが、名前はわからない。里芋の葉っぱに似て、大きなところが、私には適切なのだ。戦闘帽をぬいで、葉柄の部分をその後ろの縁にはめこみ、静かに又かぶってみた。葉っぱの冷ややかさが「うなじ」に触れ、快いほど涼しいのだ。後から照りつける南支那の強烈な太陽も何のそのだ。こうして私は〇〇部隊の兵隊さんの様に、帽子の後部に緑のビラビラをつけた。

それと一緒に、私は甘口軍曹のことを思い出した。私が短期現役にはいったのは、昭和六年で、満洲事変の起る少し前、ちょうど八月三十一日まで入隊していた。八月初の演習の時、班長の甘口軍曹は、うなじに野蕗の葉を垂れる方法を教えてくれた。顔の形が「ガマロ」に似ていることとその名前への聯想と、あの防熱装置を教えてくれたことの二つで、私はいまだに忘れられない。帽子の後にビラビラを垂れた兵隊さんを眺める度、いつも甘口軍曹を思い出すのだ。

だからして大陸の名も知らない水草の葉を垂れながらも、やっぱり私は甘口軍曹を思い出した。甘口軍曹はあの後満洲事変に出征したらしい。或は名誉の戦死を遂げたのだったかもしれない。論功労賞の活字にその姓名を見たような記憶もある。がそれは何かの間違いで、或はこの事変にも出征し、将校にでもなって、例のように働いているのかも知れないのだ。やっぱり頭の後部に葉っぱを垂れた甘口中尉殿が、今日みたいな炎天下に討伐をなさっていないとも限らない。

こんなことを考えて、歩きにくい石畳の道を歩いていると、後からついて来る広東人の宣伝員達が、何かワイワイと騒ぎ出した。話は私に向けかけられている。

「何だね。疲れたのかい？」

ふりむいた私の後頭部をさして、宣伝員達は、とがめ出した。下手な日本語でいうのである。

「イイエ。コレイケマセン。戴緑帽イケマセン」

「え？　コレ、大ヘン、スズシイデス」、

「不好呀。中国戴緑帽、不好呀！」

こんどは顔をしかめ、広東語でせまって来る。何のことかわからない。私はこの頃よく聞く「没有問題」（問題外）という熟語を思い出した。

「日本、没有問題呀。好涼呀！」

甘口軍曹の伝授により、せっかく涼しくなったというのに、何をうるさいことをぬかすのだ。私は、「日本、没有問題」をくりかえして、とっとと前進を続けたのだ。

「戴緑帽、日本没有問題！中国有問題呀！」

女の宣伝員達も意味ありげにくすくす笑いながら、私の後からついて来る。

やがて楊桃の黄色い若芽がふいた或る村にはいろうとした時、一人の宣伝員が私の前に来て頭を下げた。彼の眼は曇っていた。嘆願するようにしゃべるのを聞けば、どうも私の葉っぱのため、宣伝の効果さえ減少されるということだ。私ははじめてびっくりした。帽子をはずし、少ししなびて暖かくなった葉っぱを手にとった。と、女の宣伝員が奪うようにそれを受けとって、小川の中に投げ棄てた。私は何だか力が抜け、ちょっとばかり寂しくなった。何か恥しいことをしたような気持もした。暑いことも忘れ去って、どうしたことだろうと考え続けた。宣伝にさしつかえるというのなら仕方がない。私達の務がおろそかになる、こう思ってあきらめた。まもなくその村の宣伝もよい成績で終了し、私達は船に乗った。川をわたって南京に帰るのである。船底に坐ると、私は手帳を出し、一人の宣伝員の前につき出した。

「ハイ、ムハイ、戴緑帽？」

「ハイ」と私はうなづいた。笑いながら彼の書いてよこした手帳には、「戴緑帽ハ広東人ノ妻、改メテ嫁スルコト、就チ二重結婚ノコト」と漢字だけで書かれてある。人妻が他の男と関係することをいうのである。普通の花嫁は赤い帽子をかぶってゆく。それに対して緑の帽子というのだそうだ。なるほどこれでは中国有問題であるわけだ。この事実は日本だって大いに問題ありだ。そのために中国人は、決して緑の帽子をかぶらないという。もしも私があのまま村にはいったら嘲笑され、そんな奴につれられた宣伝員の話などは信じられないだろうというわけだ。

甘口軍曹伝来のあの防熱装置が、こんな大問題になろうとは思わなかった。私は宣伝員達にひそかに感謝したが、こんな深いわけは知らなかったという代わりに、ちょっと頸のところをなでて見せ、もう一度、「日本没問題」といってみた。同はそれをきくと、又思い出したように大笑いした。しかしそれには、今や批難する声は含まれなかった。一人の女などは靴で船底をたたいて笑い崩れた。私はこうして戴緑帽という言葉を知った。

題目の「戴緑帽」には「だいろつもう」とルビがある。ほかにも中国語部分には広東語の不正確な発音のルビがある。現在でも使用される俗語であるが、これを介して中国人の宣伝員とのやりとりが紹介されている。ここでも宣伝員、つまり中国人宣撫員が登場する。宣伝員には女性もふくまれている。彼らは国分に文化発想の違いへの注意を差し向けているのだが、緑の帽子（ビラビラ）を頭の後ろにつける発想の起点となったのは満洲事変で功績のあった甘口軍曹の防熱装置の発案である。かつて世話になった甘口軍曹のことに想いを馳せ、今頃は土匪の征伐で功績をあげているだろう、などと書き、中国民衆に寄り添う以前にも兵士としての矜持を忘れていない。また、宣伝員らに注意されたことでは、宣伝の効果、成績についても言及している。要するに傍線を引いたような箇所には、民衆への親近感というよりも統治者、占領者としての日本人が主役の目線描写にとどまっているという点を指摘したいのである。こうした視点の置き方は国分独特のものかもしれないが、無意識にもこうした場面の設定が生じたのは、国分の民衆対処の限界性をも示していないだろうか。

なお、もう一篇の「筆談帖から」（第九号）にも「料理」「栽培」という中国語をめぐる文化習慣の誤解、同文同種主義による解釈の違いがあり、これは筆談によらずとも現在でも生じかねない異言語異文化接触の場面として、ある意味で貴重な体験であるが、それ以上の意義は感じられない。

以上、国分の「花嫁宣撫」と「戴緑帽」に書かれた内容から、中国民衆をどうとらえていたかを瞥見した。こうした観点、視点は著作の『戦地の子供』の延長にあると思われるが、少年少女を観察の対象とするよりは、郊外の民衆を登場させているところが特徴である。にもかかわらず、日頃の年少者との接触による視点、発想の習慣が投影されていないともいえない。この点については筆者の印象にとどめたい。

7　中国人宣伝員の手記にみる東亜建設の虚実

雑誌『兵隊』には、国分の記事以外にも宣撫に関する記事が豊富に掲載され、またたとえば「日語教師の座談会」など。日本語教師の苦労話なども見ることができる。執筆者も早期には火野葦平や神山潤、松本健哉といった面々が筆を振るっている。当時の日本兵士の中国民衆像を知るための一級資料といえる所以である。「男装の麗人」（松本健哉）には、女子宣伝員を探してまわる「苦労」が書かれている。

私たちは、もう十日余りも「女」を探し求めていた。最初は、若くて、声量があって、女学校以上の学力でと、いろんな条件をつけていたが、だんだん譲歩して、年齢や容貌や学力などはどうでもいい、とにかく、人前に出て話をしてくれる女であったら雇い入れようという最後の線までへりくだった。それでもいないのである。私はほとほとあきれてしまった。そして、三十人に余る、若いピチピチした広東報道部の婦人宣伝員たちを頭に思い浮べ、あの中の一人か二人でも連れて来ればよかったと後悔した。

結局は日本軍の侵攻によって危険を回避するために髪を短くして「男装」していた女性を確保することになる。宣撫のもうひとつの姿が垣間見えてくる。

本稿では国分の記事に描かれた中国人宣伝員（宣撫員）についてみてきたが、以下では中国人の手記を紹介する。言うまでもないことだが、疑問に思われるのは、これほどの完璧な日本語が本人自身の手で書かれたものであるかどうか、と

いう信憑性である。他にも中国人による手記があるが、そのどれもが日本側の一定の指示によって整理されたふしが窺われることにも注意しておきたい。

女子宣伝員　　陳眉

昨年十一月、私が田舎から広州に帰った時、先ず目についたのは日本の兵隊さんでした。手には銃をかまえ、その先には鋭利な銃剣が光っていました。威風凛々、その時、私はとてもおそろしゅうございました。その中の一人の兵隊さんが、私のそばを通りすぎました。けれどもその顔には和らかな笑いがみなぎり、又持っていた一箱のお菓子を私の妹に下さいました。その時又何かをおっしゃいましたけれども、何といったのか私にはわかりませんでした。が、日本の兵隊が凶悪だとはどうしても考えられませんでした。私の心はその時やや安定したのです。第一の印象は、日本兵はそんなに恐ろしくないということでした。

それから私の眼前にあらわれたのは、多くの標語と広東迅報にのっている、日華親善や中日提携等のことばでした。けれども私はふと考えました。これは字を知っている者知識階級に対して、はじめて効果のあるもので、一般民衆はきっと口頭の宣伝を求めているにちがいない。その時私はもう黄色人種聯合の必要をしきりに考えていたのです。私の第二の印象は「日本人を仇敵視する必要はない」ということでした。

そこで昨年十二月、私は思いきって現在の報道部宣伝班にはいりました。その時すでに三人の同じ女の仲間があって、わたしよりもよほど前に参加していたのでした。第二日目には広州市内の恵福路、長寿路、河南の小港路などの宣伝についていきました。広州の市民は一日一日と多くなりました。私達は蓄音機を使って人々を呼び集め、演説や紙芝居をやりました。私は「ニュース」をきかせる役目につきました。これはなかなか聴衆の興味をひきませんので、材料を集めるのに苦心しなければなりませんでした。こうして市内宣伝にしたがうこと数ヵ月、たまたま汪精衛先生が和平宣言を発表されましたので、私達の仕事はますます忙しくなりました。幾日かの街頭宣伝によって、民衆の大部分は遂に知りました。「中国は戦争をしてはいけない！」民衆はみな和平精神に赴くのでした。私達は更に色々な方法を思い、事実をもって白人人種の陰謀と有形無形的侵略について話しました。阿片戦争のこと、植民地化した我が国のこと、我が国の基金白銀が奪われてしまったこと、しかも当政府がそれにすっかり利用されてしまったことなどです。かくて現在の広州の人々は誰も黄色人種聯合、日華親善の必要をさとりました。これがみな宣伝の効果だとはいいません。ただ民衆の思想が覚醒されて来たといえば足りるのです。

広州市内の宣伝がいらなくなると、私達は農村方面にでかけました。真っ先に佛山にいきました。まもなくその期間も増加してきました。一日から一週、一週から十日の出張へと増加し、遂には四十幾日の宣伝戦とさえなりました。

けれどもこの仕事は私達を大へん喜ばせました。ある時は遠い道をてくてくと歩む猛烈な太陽の下で仕事をするとはいえ、わずかな時間の辛苦であります。仕事が終ると私達の気持は非常に愉快になるのです。仕事の最中は厳粛な気持で、一言の冗談も言いませんが、休みになると大口をあいて話し、又大笑いをするのです。苦しみはすっかり忘れてしまいます。更に部隊が下さったサイダーなどがあると、私達は気狂のように飲みほしました。もはや何の心配がいるものでしょうか。生まれつきいたずらっこの私は、一日中談笑の中に暮らし、私の一生もこうあってくれと祈るほどでした。痛苦や困難などは感じられなくなりました。どこに出張しようが、問題はなくなりました。所が変れば、その環境が変わり気分も変りますが、私の心はのんきになりました。

最近私達は江門に出張宣伝をしました。あそこはもうすっかり恢復して大へんにぎやかになり、夜でも人々は雑踏していました。江門は元来有名な碼頭ですから、人民も割合に知識にとんでいます。私の宣伝も大へん楽しくきいてくれました。

そこの部隊の命令で、私達は前線討伐にもついていきました。そのときびっくりすることが起りました。それは一般の軍船にのって私たちが眠りについた時、にわかに機関銃の音がますます多くなったのです。ただ山の上に向かって発せられたのでほっと安心しました。十一時、はじめて私達は上陸し、農民達に向って、人民に危害を加えないこと、汝等に代って敵をうつのだということを知らせました。中国人が来たので彼らの心はやや安定したらしく、私達はその後四五日の仕事を終え、広州に帰りました。

こういう生活をしてもはや一年近くたちました。私はどういったらよいかわかりません。たゞ私の見識と経験がふえたことは少なくありません。又私の身

体は強健になりました。私の脳みそも少しはふえたでしょう。キモッタマも大きくなったようです。私はただ感謝します。これはみな報道部が私に下さった賜物です。それにこの一年広東の復興ぶりはどうでしょう。これも日本の軍隊が私達にもたらした贈りものです。

ここには宣伝員の日常生活がやや誇張して語られているが、どこで日本語の訓練を受けたのかも書かれていなければ、文化の齟齬による苦悩なども一切ない。報道部の日本人が（あるいは国分自身でもあったかもしれないが）適当に脚本を書かせたかのような節もうかがわれる。とはいえ、各地の占領地で布告を読み、また街頭宣伝をする宣伝員の姿が目に浮かぶ。日本軍は彼らを思想・情報戦として活用した後、どのような処遇を与えたのだろうか。また、戦後、彼女達の運命に想いを馳せることはあったのだろうか。すべては戦争によって費消されたかのようで、人生を翻弄されたことに対する重い読後感しか残らない[5]。

おわりに

戦地で編集・刊行された雑誌として現地の風土風俗・庶民民衆の暮らし（冠婚葬祭も含め）をスケッチした『兵隊』は多くの検証すべき内容が満載されている。各頁のヘッダーには「護国の英霊を敬仰せよ」「敵意なき支那民衆を愛隣し恩威並び施さねばならぬ」「自惚と油断は何よりも禁物である」といった訓示も書かれている。戦場における前線・銃後を問わず異言語・異文化・異民族の接触場面が記録されているという点ではきわめて稀少な資料である[6]。本稿では日本軍の〈宣撫〉活動について、国分一太郎の文章を対象に考察を進めたが、このほかにも、『兵隊』には宣撫活動については「宣伝隊」「宣伝員」という呼称で書かれたものも含めれば、相当数が散見され、例えば次のようなものがあげられる[6]。

「宣撫の原理」（古賀部隊・田中秀苗）
「路傍に拾った小さい宣撫」（西田隊・大池二喜造）
「皇軍と兵隊・広東語」「男装の麗人」（松永健哉）
「兵隊と宣撫」（石松隊・小野正一）

このほか本稿で言及した中国人宣伝員（宣撫班員）による手記もあるが、それらに描かれた内容、描写の背景についても検討が必要であろう。

日中戦争下における日本軍兵士と現地住民との言語文化の接触から、もう一つの戦場の日常が垣間見える。その記録から何を後世の教訓とすべきだろうか。

戦時下においては〈文化侵略〉ということが言われる。現地の宣撫活動に従事した宣撫員には侵略の意図・自覚はなかったかもしれない。しかし、他民族への言語文化の教化・普及活動には目に見えぬ抑圧、民族優位の思想が潜在していたことは確かであろう。それは現在もなお、日本語教育という姿態で世界各地に日本語が〈輸出〉されている現況を考えれば、かつての不幸な歴史においても言語文化接触があった事実を克明に記録・観察し、負の遺産があれば謙虚に受け止めなければならない[7]。

附記

筆者は大学卒業（一九七四年）後、ほとんど間をおかずして財団法人海外技術者研修協会に奉職、以来今日まで途中大学院での期間をはさみながら国内外の機関において、半世紀近く日本語を教える仕事をなりわいとしてきた。多国籍の学習者に向かい合う中で、かつて戦争の推移とともに日本語を外地に普及せしめた歴史が、脳裏を離れることはなかった。まず、学習者の文化背景、習慣を知ることなくして日本語教育などという上から目線の指導がうまくいくはずがないと思っていた。あれから半世紀近く流れた。いま、大学の職務を離れる時、反省すべきことが多々あるのを禁じ得ないが、最後にこの小文をもって民衆への接近と理解がいかに多くの課題をはらみ、困難であるのかを記録することとした。

註

(1) 創刊から7号まで「遍以多以」「へいたい」と表記された。復刻『雑誌 兵隊』全36冊（2004.7　刀江書院）を参照した。最近の研究では、宮本（2020）がある。その全貌については石田一郎らの座談会（2002）によってほぼ知ることができる。

(2) 津田は『国分一太郎　転向と抵抗のはざま』（三一書房　1986）が増補改訂された新版では『国分一太郎　抵抗としての生活綴方運動』（社会評論社　2010）と変更されており、「転向と抵抗のはざま」が意図的に削除され、「抵抗」だけが残され、「生活綴方運動」がいっそう称揚されている。

(3) 宣撫員の活動の実態については小島利八郎（1942）、青江舜二郎（1970）、また上田廣（1940）などの従軍作家（兵隊作家）にも断片的ながら綴られている。なお、

竹内（1992）は「ああ大東亜共栄圏」（難民の思想／建国の思想／宣撫の思想）において満洲国建国から満蒙開拓団の潰走に至る、その萌芽から崩壊までの過程で宣撫という思想の位置づけを行っている。

(4) 木原孝一の『戦争の中の建設』は石川巧・川口隆行（2013）からとった。

(5) 日本軍兵士の携行した軍用支那語をはじめとする語学書の実態については、田中（2015b）に比較的詳細に述べている。

(5) とくに松本健哉は宣撫活動としての日本語学校の位置づけに苦悶した様子が「日語学校」という創作にたくしている。田中（2015）に全文を収録。

(7) 近年、中国では戦時期の宣撫関連の資料の検証が進んでいる。たとえば、黄彩霞・王升遠(2018)、張憲文主編《日本侵華図志》(2015) など。

参考文献（一部）

《日本語文献》

青江舜二郎 1970　『大日本宣撫官　ある青春の記録』芙蓉書房

石川巧・川口隆行 2013『戦争を〈読む〉』ひつじ書房

石田一郎・大濱徹也・鈴木正夫 2002「兵隊の投稿雑誌『兵隊』をめぐって」『刀水』No.6 刀水書房

井上寿一 2007『日中戦争　前線と銃後』講談社学術文庫　原本『日中戦争下の日本』講談社選書メチエ

上田廣 1940『りんふん戦話集』河出書房

川村湊 2000『作文の中の大日本帝国』岩波書店

黄自進・劉建輝・戸部良一 2017『日中戦争とは何だったのか』ミネルヴァ書房

小島利八郎 1942『宣撫官』錦城出版社

坂本礒穂 1941「教育書評　国分一太郎著『戦地の子供』」、『教育』52号　岩波書店

新東亜研究会編 1939『興亜ノート　新東亜の時事問題早わかり』国民図書協会

竹内実 1992『日本人にとっての中国像』(同時代ライブラリー) 岩波書店

田中寛 2015a「戦争が遺した日本語(1)「少国民綴り方」戦時童話の世界」　同『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相　日本言語文化政策論序説』所収、ひつじ書房

田中寛 2015b「戦争が遺した日本語(2)「憲兵支那語」と「軍用支那語」を中心に」　同『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相　日本言語文化政策論序説』所収、ひつじ書房

田中寛 2018「文学作品にみる日中戦争下の〝言語接触〟」、『教職課程センター紀要』No.3　大東文化大学教職課程センター　91-102

津田道夫 1986『国分一太郎　転向と抵抗のはざま』三一書房、のちに『国分一太郎　抵抗としての生活綴方運動』社会評論社　2010　改訂新版

津田道夫 1999「国分一太郎　東シナ海を渡る」、石塚正英編集『海越えの思想家たち』、社会評論社

成実朋子 2008「国分一太郎と「中国」-『戦地の子供』をめぐって」大阪国語教育研究会『小田迪夫先生古稀記念論文集』

前田均 1998「国分一太郎の戦時下の作品について」『天理大学学報』第49巻第2号　第187輯　1112

前田均 2001「国分一太郎の従軍体験に基づく作品群」『日本語・日本文学の研究：前田富禎先生退官記念論集』前田富禎先生退官記念論集刊行会編

宮本めぐみ 2020「雑誌『兵隊』に掲載された中国現代文学作品」『中国文学会報』第三九号　お茶の水女子大学中国文学会

山中恒 2010『戦時児童文学論　小川未明、浜田広介、坪田譲治に沿って』大月書店

復刻『雑誌兵隊』2004.7　全36冊　南支派遣軍報道部　刀水書房

《中国語》

黄彩霞・王升遠(2018)〝不拿武器〟的侵略：日本対華〝宣撫工作〟與〝宣撫文学〟研究争議〉、《山東社会科学》2018.6　84-90

吳艷(2018)〈日本侵華戦争時期的〝筆杆部隊〟〉、《南開学報》：哲学社会科学版（天津）2018.6　104-113

張憲文主編《日本侵華図志》全二五巻　山東画報出版社　2015　など